

□ ふれあいとうるおいのあるまち

地域情報誌 Vol.1 No.1

はばたき

□ 発行 わがまち大田羽田地区推進委員会

□ 編集 はばたき 20 編集委員会



羽田のあさり船 (写真 金子勝男氏提供)

羽田がたり

執筆 鈴木 喜尚
題字 佐藤 佳代子
カット 伊藤 幸子

巨大クレーンとヨイトマケ
羽田、私達のふるさとである羽田の様変りを街の人々はどうみているのでしょうか。

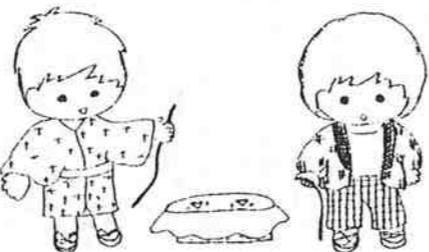
空港の沖合移転工事の巨大な馬のような林立する機械に、往時の羽田競馬場を思い出す人、それらの近代的な重機を見ながら、戦前、子供時代に町の其処此処にみられたヨイトマケの姿、とりどりの思いを馳せながら、今日も時は過ぎていく。

その後流行したヨイトマケの唄は哀愁を帯びたメロディだったが、現実のヨイトマケは、もっとリアルで子供心にも一寸はずかしような唄を口にしつつ、くつたくなさと生活の染みが入り交じり哀調よりも、もっと陽気な、いわば、底辺に生きる人達の生の証しのような唄であった。

表通りを通らず、家々の軒先づたいに露地を通り抜けていった小学校の行き帰り、べえごまの音があちこちで聞こえ、ゆうげの匂いの立ち込めるなか、家々で大きく明るい、ときには叱られる声もつづぬけで、あけっぴろげな庶民の生活が、この町の住民の連帯意識を強め独特の雰囲気をかもし出していた。貧しいが暮しよ羽田の姿でもあった。土着の人間の良さと思いを身につけながら羽田の人達は戦争から敗戦、そして戦後へと移行した。

めまぐるしい変遷の中で、当然のことながら、ある人はみごとに開花し、ある人は道をあやまり、土地を追われていく。こもごもの社会の縮図のなかで、羽田も大きく変わっていった。戦後の羽田の進

展はめざましく、その名は全世界に知られた。成田新空港の登場で、羽田は主役を下りたが、航空公害は少しも是正されなかつた。



人物往来 ①

小野 藤三郎さん

羽田の名門、小野一族の栄光を背に九十歳を超え、今なお経営の第一線で活躍する



藤三郎さんは、土地の人なら誰しも、知っている羽田の篤志家、明治、大正、にわたり、郷土羽田の商業、教育に、多大の貢献をした人、藤兵衛さんこと、三代目小野藤兵衛翁の分家、七五三醤油で知られている。藤三郎さんは明治三十四年一月生まれ

の九十二歳。羽田小から芝の正則中に学び、卒業後家業の醤油醸造に従事、以来七十有余年、一筋に励み今も会長として経営に参画している。

戦後、醤油業界が統制経済に訣別するや、進んで東京都醤油工業協同組合を興し、二十年以上、理事長として業界をリードし、また醤油業界の行く末を案じ、広く三

多摩を含めた、東都醤油製造協同組合を、十二業者で組織し、理事長として平成四年八月まで、十五年の長きにわたり活躍された。

ヒゲタ醤油と業界初の生産契約を結び、品質の向上、安定供給を促し、今でも毎月一回、品物を持ち寄って、品評会を実施、合格したもの、JASマークをつけ、売り出す等、理事長を勇退した今も古参役員として、自らそれに臨み、研さんにつとめている姿は、明治男の意気込みを感じる。

今日、巷で弁当等に見られる、小物醤油に着眼、いち早く導入し研究を重ね、主要品目として、成果をあげるなど、見事な経営手腕を発揮している。

週に二、三回、デパートに行き、包装関係、食品売り場で商品の実態、顧客の好み等を調査研究し、一つのデパートで約百段くらいの階段を、行き来し、それを三カ所くらい巡るといふから、普段すぐエレベーターや、エスカレーターを利用する連中には耳の痛い話だ。タクシーは殆ど利用しないと、歩くことが健康の基本とも言う。

羽田の名家だけに、長照寺の筆頭総代として戦後の復興に尽力し、檀家千三百軒の信望を一身に集めている。

藤三郎の名は、分家初の男子誕生を悦んだ本家三代目藤兵衛翁が自らつけたと言う。

記念すべき創刊号に寄せて

日本の玄関口だった「羽田」から、どれ程沢山の人が各国にはばたいて行ったことでしょうか。世界で活躍していることでしょうか。

全国誌、地方誌ではない羽田のまちの「かわら版」のような地域情報誌「はばたき20」が生まれました。まちの皆さんの息づかいが伝わるようなはばたき20に、ご近所の話題になるようなはばたき20に、そして自分も何か書いてみたいと思える親しみがいっぱいのはばたき20に、と願っています。

歴史ある羽田のまちが未来に向けて更に大きくはばたくことを期待して。羽田特別出張所長 佐藤 佳代子

発行に際し、二十町会それぞれから、選ばれた編集委員は、各自の特色を活かし、衆知を結集してその任にのぞきました。

住民サイドの情報誌は、何分にも初めてのことで、戸惑いの中よりのスタートでしたが、自主、不偏を貫き公正な視点に立ち、地域住民の皆様に的確な情報を提供し、併せて郷土羽田の正しい姿を知り、誇りある郷土に関心を呼び実生活に寄与したい所存です。

発行にのぞみ佐藤所長を軸とした羽田特別出張所の職員の皆様の多大のご協力を深謝致します。編集委員長 鈴木 喜尚

発行に際し、二十町会それぞれから、選ばれた編集委員は、各自の特色を活かし、衆知を結集してその任にのぞきました。

羽田大鳥居町会
一日の乗降客約一万五千人。羽田への玄関口、京浜急行の大鳥居駅を町内に抱える羽田大鳥居町会です。俗に羽田の山の手? と呼ばれている町会は、羽田の人口で全国各地からの転入者がかなり多く、昔からの土地の人達と何のわだかまりもなく溶け合っている珍しい土地ではないかと思う。

羽田西町町会
昔、羽田村は半農半漁の一集落であった。元禄六年羽田村から羽田獵師町(産業道路付近から海老取川)が別れ、その約百年後の文化十二年、羽田獵師町から鈴木新田(現空港内)が分かれた。後に羽田三ヶ村と呼ばれ政治・経済・文化を共有し現在に至っている。現西町の位置する羽田獵師町は明治から昭和への時代に、西町(西町(上西、仲西)、前河原)、仲町(横町、稲荷前、下仲)、東町(上東、仲東、大東)に大別され、



大東町会
大東町会は現在、戸数も少なく、町会としても小さい。しかし昭和二十年頃は仲七町会の約三分の一の面積も大東町会内であった。羽田の一番東の位置にあってしかも町会として名付けられた。多摩川の最下流にあり、川沿いを散歩すると川の汚いことに恥らを感じる。また遊歩道も駐車場化している。この情報誌を通じて多数の方の意見を聞きたい。空港跡地も身近なところにいるが、急がず良いものを検討するのが良い。

羽田旭町町会
当町会は空港線・海老取川・首都高速羽横線にかこまれた広い地区であり、中央を環状八号線が貫く。地域は駅前商店・住工の混在、さらに大工場跡地があり、将来発展が望まれている。現在、平成五年四月一日開業をめぐり、空港線の延伸工事が進められている。羽田地区から海老取川を渡った地下に、建設中の「羽田駅」までの約七百メートル。「羽田駅」は利便を考慮して、川に現在架橋中であり、名称は地元小学

小区に分割された。羽田獵師町の西の端に位置するので、そう呼ばれるようになったわけである。現在の西町は東を首都高速、西を産業道路、南を多摩川、北を空港への幹線道路に囲まれた町である。

羽田横町町会
我が横町町会、これといった特徴もない小さな町会ですが、そ

本羽田二丁目町会
本羽田二丁目町会



町の中に羽田神社の御旅所がある。現在の羽田神社が昔はここに祭られていたとのこと。例年の大祭に神官をはじめ羽田の各町会の神社役員がバスで来られ、祝詞に続き神楽が奉納される。
羽田本町三丁目町会
当町会は四百二十世帯で成り立つ小さな平凡な工場地帯、その真ん中に公園がある。その公園、昔はゴミ焼却場で高い煙突が二本建ち、それが目印でしたが、住民の嫌われもので壊され、今では冒険公園に生まれ変わった。
公園の南側は多摩川に面している、朝早くから夜遅くまで散歩する人、ジョギングする人で賑わい、また日曜日ともなれば小学生が野球の練習に励んでいる。平日は「老人がゲートボールの練習などしておられ、遊び場所に恵まれている。

秋中町会
昔、この地域は多摩川に近いため、湿地帯で葦が生い茂り、毎年の台風等による洪水で、たびたび一面冠水し、そのつど土砂を運び、小高い丘を所どころに築き、そこは雑草に混じって萩が一面に生い茂ったようである。私達の先祖は萩の生い茂る丘を選んで部落を作り、住んだので「秋中」の名称が生まれたとの伝説がある。
最近では多摩川の護岸が整備され、川上の登戸あたりの河原に少し萩の花が見られ、その面影をわずか残すのみとなった。(資料提供 大山一朗氏)



大東町会
当自治会はJR東日本の社宅で世帯数が一七四戸です。永年、国鉄秋中自治会と名乗ってきたが、昭和六十二年、国鉄からJR移行に伴い、秋中自治会と名称変更を行った。新自治会名を決めるに当たり、JRの語句を入れるのは公的な機関名としてはまずいと意見があり断念した。両親は故郷を持って居るが、子供達の故郷は大田区萩中であり、愛着を育てるため、子供達全員が通学する秋中中小と同じ由緒ある「秋中」がよいと役員会で決定した。秋中萩中の名称を使用するため、秋中町会等に了解を得て、現在に至っている。(会長・戸塚祐治)